

8610 第二次大戦後、アメリカの個人主義が・・・

第二次世界大戦後、アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ、親子のタテの関係は、封建的というので、最も厳しい批判のマトになった。年をとっても子供の世話をなどにならない強い個人、これを実現するためには過保護とか甘えを超克すべきだ。過保護とか甘えは、個人主義が確立していない前近代的な遺物だ。だから、西欧並みの核家族を日本にも作り上げる必要がある。簡単にし過ぎたところもあるが、これがアメリカ社会を範として、日本で描き上げた近代家族像だったようだ。

板坂 元：アメリカを読む

#### [許容訳例]

After the second World War, Japan accepted American individualism as a golden rule. As a result, the vertical parent-children relationship became the target of severe criticism, for people thought it was feudal. “We should not” they told themselves, “cling to the old excessive protection and dependence but create a strong individual who does not want to be taken care of by his children even when he is old. Excessive protection and dependence are handovers from the premodern age when individualism was not yet established. Thus, it is necessary to create a nuclear family in Japan is in the West.” The above, I feel, though it may be oversimplified, is the ideal modern family which the Japanese envisaged, based on the model of American society.

#### [翻訳例]

Following World War II, when American-style individualism was taken over by Japan as a kind of universally applicable yardstick, the vertical parent-child relationship was subjected to particularly harsh criticism on account of its “feudal” nature. The strong individual unwilling to depend on his children even in old age became a kind of ideal, to realize which it was considered necessary to overcome the old habits of overprotection and overdependence. These, it was considered, were both relics of the premodern age before individualism had been established, so that there was a need to create a western-style nuclear family in Japan, too. This, as I see it, though I may have oversimplified somewhat, was the ideal of the modern family envisaged by the Japanese with American society as its model.

■第二次大戦後、アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ、親子のタテの関係は、封建的というので、最も厳しい批判のマトになった。(8610)

●「文解釈」([修辞的工夫・連用形]と副助詞〔は〕の組み合わせ)

この文は、二つの解釈が可能です。一つは、「第二次大戦後、アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ」と「親子のタテの関係は、封建的というので、最も厳しい

批判のマトになった.」という二つの文が‘並置’されたものという解釈です。これを英語にしやすいように書き改めると、「第二次世界大戦後、アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ、(そして)親子のタテの関係は、封建的というので(→という理由で)、最も厳しい批判のマトになった.」になります。これでもいいのですが、もう一つは、「・・・受け入れられて」としないで「・・・受け入れられ」としたところと、「親子のタテの関係が・・・」としないで「親子のタテの関係は・・・」となっていることをよく考えると、筆者の言いたいことは、並列的な事実の伝達ではなく、「第二次大戦後、親子のタテの関係は最も厳しい批判のマトになった.」が主で、その理由として、「アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ、(それで)封建的ということになって」が従の関係にあって、これを理由として主張の前に挿入したように思われます。つまり、「第二次大戦後、(アメリカの個人主義が金科玉条として日本に受け入れられ、(それで)封建的ということになって)(特に)親子のタテの関係は最も厳しい批判のマトになった.」と解釈することも出来、かつ、欧米の論理的文章作法に合うと思われます。

#### ◆「・・・後」(after と following の違い)

「第二次大戦後」は After the Second World War [World War II] がすぐ出てくると思います。after を使ってもいいのですが、after は、はっきり前のことと対比する時か、あるいは、「～の後に・・・が起きた」というニュアンスで使うのが普通です。これに対して前置詞 following を使うと、持続性・連続性が出る感じで、場合によっては軽い因果関係もあらわすことができます。特に、Following the Second World War [World War II], when…とすると、上の「文解釈」で述べた二つ目の解釈に対応するのにふさわしいと思われます。

★「アメリカの個人主義」は American individualism ですが、もう少し正確に言うと American-style でしょう。

★「金科玉条として」は as a kind of universally applicable yardstick です。yardstick というのは「(判断の)基準・尺度」という意味です。なお、厳密に言うと individualism というのは rule ではないので、ちょっと引っかかりますが、as a global [golden] rule でも許されるでしょう。

★「日本に受け入れられた」は was accepted by Japan [the Japanese] で間違いではないのですが、非常に受動的な感じです。こここの「受け入れられた」には積極的なニュアンスが含まれていると感じられるので was taken over by Japan [the Japanese] がいいと思います。take over というのは「(思想・生活様式などを)まねる・取り入れる」という意味で、積極性があります。ですから、主語を Japan とか The Japanese として Active Voice も可能です。

★「親子のタテの関係」は the vertical parent-children relationship ぐらいです。

★「封建的ということで」は on account of its “feudal” nature とします。引用符を付けたのは「ほんとにそうなのかどうかわからないが、とにかく当時の人はそう考えていた」という含みを持たせるためです。なお、people thinking [people thought] that it was feudal することも出来ます。

★「最も厳しい批判のマトになった」の「最も厳しい」は最上級と解するよりも「特に厳しい」と考えるべきで, was subjected to particularly harsh criticism とか became the target of severe criticism ぐらいです. be subjected to…は「さらされる」の感じです.

■年をとっても子供の世話などにならない強い個人, これを実現するためには過保護とか甘えを超克すべきだ. (8610)

### ●地の文中の直接話法の処理

「年をとっても・・・」から三行先の「・・・作り上げる必要がある」までは, 筆者の主張・意見ではなく, 当時の日本人が心の中で思ったこと, あるいは考えたことが, そのまま地の文として用いられています. 日本文と同じように‘現在時制’を使いたいなら伝達動詞 (they told themselves とか they thought)を加えて‘ダブルクオーツ(“…”)’で囲まなければなりません. そのまま地の文とするなら‘過去時制’に改めなければなりません.

★「年をとっても」は even in old age とか even when he is old ぐらいです.

★「子供の世話などにならない」は, 英語的には「子供の世話になりたくない [なりたがらない]」ということで, does not wants to be taken care of by his children とか is unwilling to depend on his children とかでしょう.

★「強い個人」は a [the] strong individual です.

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(年をとっても子供の世話などにならない強い個人)

「年をとっても子供の世話などにならない強い個人」は「連体修飾節 (年をとっても子供の世話などにならない) + 体言 (強い個人)」ですから, 英語では「名詞(a [the] strong individual) + 関係詞節(who does not wants to be taken care of by his children/ (who is) unwilling to depend on his children)」です.

★「過保護」は excessive protection とか overprotection などです.

★「甘え」は dependence とか overdependence です. indulgence は「甘やかすこと」ですから, ここでは使えません. なお, 裏に含まれている‘従来の’を文面に出して old とか old habits ofなどを加えると論旨がはっきりします. 余談ですが, 土居健郎著の『「甘え」の構造』を英訳したのはジョン・ベスター氏で, 表題は *The Anatomy of Dependence* となっています. ベスター氏は *The Anatomy of Indulgence* にしたかったのですが, 原作者が Dependence にしてくれと主張して, 書名が決まったのだそうです. dependence (依存すること) と indulgence (甘やかすこと) は子供の側からと親の側からという視点の違いかな.

★「超克すべきだ」は, 人(we)が主語なら We should not cling to [should overcome; should rise above]～です. また it was (considered) necessary to overcome…という書き方も可能です.

### ●文の解釈と英文の構造

「年をとっても子供の世話などにならない強い個人, これを実現するためには過保護とか甘えを超克すべきだ」の「これ」はすぐ前の「年をとっても子供の世話などにならない強い個人」を指しています. したがって, 「これ」を省いて「年をとっても子供の世話などにな

らない強い個人を実現するためには・・・」と続けることが出来ます。そうすると、 In order to create [realize] a strong individual who ..., we should overcome [rise above] the old excessive protection or dependence となります。ただ、「年をとっても・・・強い個人、これを実現するには・・・」という書きっぷりから判断すると、筆者が伝えたいと思っていることは、「年をとっても子供の世話などにならない強い個人(△というのが、一つの理想であり、)これを実現するためには‘従来の’過保護とか甘えを超克すべきだ」ということであるようと思われます。そうすると、 The strong individual(,) unwilling to... became a kind of ideal, (in order)to realize [for the realization of] which it is (considered) necessary to overcome the old habit of overprotection and overdependence ...となり、 ほぼ日本語の情報（イメージ）の順序を守りながら翻訳することが出来ます。翻訳というのは、このように日本文を読み取る技量、情報の順序をなるべく壊さないような連結の技量の組み合わせです。

■過保護とか甘えは、個人主義の確立していない前近代的な遺物だ。 (8610)

★「過保護とか甘え」はすぐ上の文にあるので、繰り返さないで these で受けてもいいでしょう。

★「個人主義の確立していない」は「個人主義の確立する前の」とか「個人主義の確立していない時の」ということですから、 before individualism had been established とか when individualism was not yet established です。なお、後者の場合は yet を加えた方が時間差がはっきりします。

★「前近代的な遺物」は relics of the premodern age とか、 hangovers from the premodern age などです。

■だから、西欧並みの核家族を日本にも作り上げる必要がある。 (8610)

★「だから」は so とか so that など。 so that の方が前節との因果関係が強く出て結果に比重がかかります。

★「西欧並みの・・・」は「欧米並みの・・・」とでも改めないと、最初の「アメリカの個人主義・・・」と合いません。「欧米並みの」をそのまま形容詞にするなら Western-style ですが、副詞として処理するなら as in West です。なお、会話では as と同じく like も使われますが、書き言葉としてはアメリカでもまだ定着していないでしょう。

★「核家族」は a nuclear family です。

★「作り上げる必要がある」は there is a need to create～とか、 It is necessary to create～などです。

■簡単にし過ぎたところもあるが、これがアメリカ社会を範として、日本で描き上げた近代家族像だったように思う。 (8610)

★「簡単にし過ぎたところもあるが・・・」は「簡単にし過ぎたかも(ているかも)しれないが・・・」と考えて though it may be oversimplified とか though I may have oversimplified somewhat など。 somewhat (いささか) は「・・・ところもある」に相当しますが、代わりに in some ways を使っても構いません。

★ 「これが・・・」は This…とするか、「今まで述べたこと」と解して The above…としてもいいでしょう。

★ 「アメリカ社会を範として」は based on the model of American society とか, with American society as its model など。

★ 「日本で描き上げた～」は the Japanese envisaged とか envisaged by the Japanese です。envisage は imagine に近い言葉で‘頭の中に描く’という意味です。

★ 「近代家族像」は the ideal modern family とか the ideal of the modern family です, ここでは‘ideal’を加えないと論旨が正しく伝わりません。

● 「連体修飾節+体言」(日本で描き上げた近代家族像)

「日本で描き上げた近代家族像」は「連体修飾節(日本で描き上げた) + 体言(近代家族像)」ですから, 英語では「名詞(the ideal modern family/ the ideal of the modern family) + 関係詞節(which the Japanese envisaged/ (which was) envisaged by the Japanese)」です。

★ 「・・・ように思う」は I feel…ぐらい. あるいは This, as I see it, thought I may have…のように as I see it を挿入してもいいでしょう. なお, I think…は論理的すぎてここでは好ましくありません.